

<幼稚園教育>

幼児が充実した園生活を過ごすための援助の工夫

—— 身近な素材と環境にかかわらせながら ——

豊見城村立長嶺幼稚園教諭 當 銘 ノリ子

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究仮説	1
III	研究の全体構想図	2
IV	研究内容	3
1	素材の教育的意義	3
(1)	素材とは	3
(2)	砂遊びの教育的意義	3
(3)	水遊びの教育的意義	4
(4)	土遊びの教育的意義	4
2	援助の工夫	4
3	充実した園生活	5
4	砂遊びの年間指導計画	5
5	素材、環境の年間指導計画	6
6	実践事例	7
(1)	保育実践	7
(2)	事例を通して発達と援助を考える	8
(3)	実践からの考察	9
V	研究の成果と今後の課題	10
1	成 果	10
2	今後の課題	10

＜幼稚園教育＞

幼児が充実した園生活を過ごすための援助の工夫

—— 身近な素材と環境へかわらせながら ——

豊見城村立長嶺幼稚園教諭 當 銘 ノリ子

I テーマ設定の理由

幼児期は豊かな人間性を形成するための基礎を培う時期として重要である。幼児期の育ちが一生を左右すると言っても過言ではない。『幼稚園教育要領』第一章総則・幼稚園教育目標の中で「多様な体験を通して豊かな感性を育て、創造性豊かにするようにすること」と示されている。さらに指導書の領域「表現」の内容の中で「いろいろな素材を使って遊んだり、遊びに使うものなどを工夫して作ったりするなかで、その特性を知って、それを生かした使い方に気付いていくことは表現する意欲や創造力を育てる上で必要である」と示されている。

入園当初、幼児はそれぞれ個人差はあるが、園内にあるいろいろな環境に興味を持ちそれぞれにより関わりをもち発達してきた。身の回りに豊富にある素材に幼児が気軽に触れたり、作り替えたりして遊ぶ姿を見つめつつ日常の保育を援助してきた。しかし、これまでの教師の反省として身近な素材についての認識は弱かったのではないかと考える。単に幼児が砂遊び、泥んこ遊び、水遊びに興じているという認識程度で、それを積極的に日常の保育のために活用するということに至らなかった。又、素材のもつ特性をしっかりと把握し、保育にどう生かすことができるのかについて積極的に考え、保育の場に取り組んできたかは、疑問が残る。

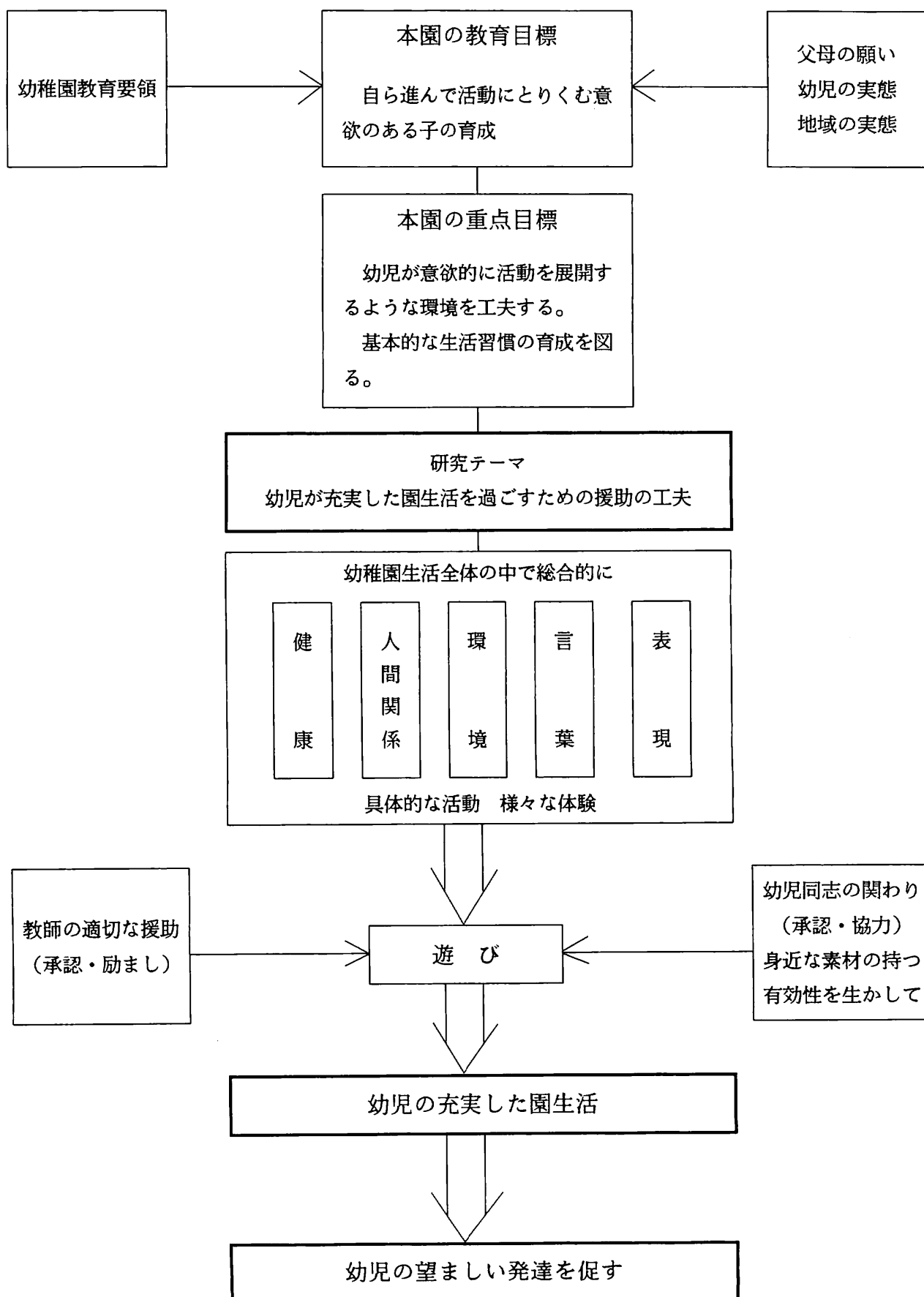
幼児が心を開いて十分な遊び込みが期待できるもの、楽しく思いっきり遊べるもの、その中で友達との人間関係、協力関係が期待できるもの、創造的な遊び、探求心を育てることができるものなどを考えるとき、「砂・水・土」は保育に生かせる有用な素材であることに気がつく。友達との関わりがうまくいかないとき、砂・水・土は心の修復に役立つ。又だんご作り、ケーキ作りなど、幼児の発想の思うがままの型作りができる。また、それぞれをうまく取り合わせて、トンネル・川・池などダイナミックに遊ぶことができる。それらの素材は幼児が共に力を合わせて、作りあげていくときの満足しきった表情、十分な遊び込みをした後の充実しきった表情を見る時、幼児の育ちに大きく役立っていることがわかる。幼児と共に生活しながら、教師の援助もその中において生かされてくる。

そこで、日常の保育のなかにおいて、幼児が生き生きと園生活にとりくみ、積極的に身近な素材を生かし、教師が適切な関わりを持つことにより幼児の創造性、言語力、想像性、身体的、人間関係の発達が促されるものと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

身近な素材を園生活の中に取り入れることにより、幼児の遊びが楽しくなり表現が豊かになる。その表現を保育者自身の豊かな感性により認め、更に幼児同士が認めてやることにより、表現活動がより活発になり園生活が楽しく充実したものになるであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 素材の教育的意義

(1) 素材とは

一般に素材とは、元になる素材、全く何も手をつけてないものを言う。幼児にとっての素材とは、本来は遊具としては作られておらず、活動を行う時に素材として使うもの、幼児が手を加えて変化させたりできるものである。幼稚園でよく使われている身近な素材として、砂、水、石、木の葉、木の実、野草等の自然物がある。廃材では、空き箱、空き容器、紙、粘土、木片等がある。身近にあるいろいろな素材は気軽に触れることができ、又使って、遊ぶ中でそれらの特性に気づきそうした特性を生かすなどをして様々なものに工夫して作りあげていく事ができる。

幼児を取り巻く環境の中に幼児の興味を引き、積極的な働きかけを促す素材、手応えを感じ、取り組むことができる素材が多くある。これらの魅力的な素材は幼児にとって応答的環境を作り出すことに重要なはたらきをする。又幼児がまだ十分に使いこなせない素材に出会った場合には、幼児の活動を促すものとはならない。かえって感動を沈滞させてしまう。教師は幼児の発達の姿をとらえて適切な素材が選べるように配慮する必要がある。

(2) 砂遊びの教育的意義

① 感触を楽しみ解放感を味わう。

日頃幼児は砂、土をかきまわしたり、目的のないような動きをしているが、何の意味もないように見られる動きが、幼児の心に安定を与え、何かを感じとらせ、様々なイメージをかきたてている。安定感を持つということは、すべての活動に関わってくる。

② 興味を持って、自由に伸び伸びと表現する力を養う。

砂はその感触が快いものを与えると同時に、幼児の思っていることや、作ろうとするもののイメージを具体化してくれる。しかし、その砂の状態によっては、高くしていた山がくずれたり、砂が水で流れてしまったりすることもある。まず、思うような表現、だんご作りのような遊びが十分にできると、幼児はいろいろ考えたり、試したりしながら次への発展を考える。初めは手で砂をいじっているうちに何かができるのである。遊んでいるうちにイメージが広がる。初めの頃の砂遊びに次々といろいろな活動が加わり、繰り広げられる。表現する力を養うために砂という素材から生まれる活動を認め教師も一緒に遊びに入り、自信を持たせイメージが持てるように援助することが重要になってくる。

③ 友達と一緒に関わりながら協力する態度や、お互いの話し合い、遊び方等がわかるようになる。

遊びの中でのぶつかり合い、物の取り合いは集団の遊びの中でなければ得られない経験である。砂遊びは幼児にとって興味のある遊びなので物の取り合いがよく起きる。安定感を持たせたいときは、一人一人が落ち着いて遊べるような遊具を用意することが大切であるが、時には同じ物で遊ぶということから起こる関わり合いを大切にし、こうしたぶつかり合いも必要になってくる。だんだん砂場での遊びの経験が豊かになると、幼児同士がいろいろな目的を持って、計画的に見通しを持った動きが始まる。集団の中からそれぞれの役割ができたり、リーダー的な発言で遊びのかじをとる幼児も出てくる。幼児は集団の中で人間関係の様々な経験をする。そこで教師は幼児が遊び込んでいる姿に満足することなく、グループの中での個々のつながりを見る必要がある。

④ 創意工夫する。

砂の特性そのものが、作ってはくずし、くずしては作るといったことが簡単なので、それぞれの年齢に応じた物が作り出せる。(例えば、プリン作りではくずれないものを作るにはどうしたらよいか) 湿り具合、型抜き時のタイミング等をどうすればよいか作る時に物の性質の關係に気づくのである。「もっと沢山」「アレ重くなった」「いっぱい吸んで来て」というような、生活の中の量と言葉の關係も、経験を通して知ってくる。

(3) 水遊びの教育的意義

水遊びは他の素材と一緒に活用することにより発見したり、思いついたり、考えたり、工夫したり

する態度を育てる。以前と比べ幼児の遊ぶ環境は狭まっている。幼児が生活している地域では、砂や泥のある場所が少ない。幼児が関われる水、水たまりがだんだん少なくなり幼稚園で砂場での水を使っている活動が幼児の発達上重要になってくる。

(4) 土遊びの教育的意義

土を使っの遊びは泥んこ遊び、だんご作り等がある。土で遊ぶ時は水と砂が必要になってくる。単独に土のみでの遊びは少ない。土に水を混ぜてやがてどろどろになりそこから泥んこ遊びになり、体じゅうにぬりたくりをして楽しむ。泥んこの感触を楽しんでいるときは友達との会話もはずみ、イメージを共有しながら泥遊びが展開されていく。泥遊びを十分に遊び込んだ後は泥に固い土を混ぜてだんご作りをする場合がある。くずれないだんご作りを目指して失敗を重ねながら、やっとイメージしただんご作りが成功するのである。最初は砂の材質を選択しないで手あたり次第に砂を使うが、試行錯誤しながらだんご作りに適しているさらさらの砂を見つけるようになる。最初にだんご作りを始めるときは友達が作るのを見て刺激になって作り始める。

砂、水、土を使って思う存分に遊び込んだ後は満足そうな表情になり、先生の話落ち着いた聞けるようになる。解放感を十分に味わい次の遊びへのステップとなる。

2 援助の工夫

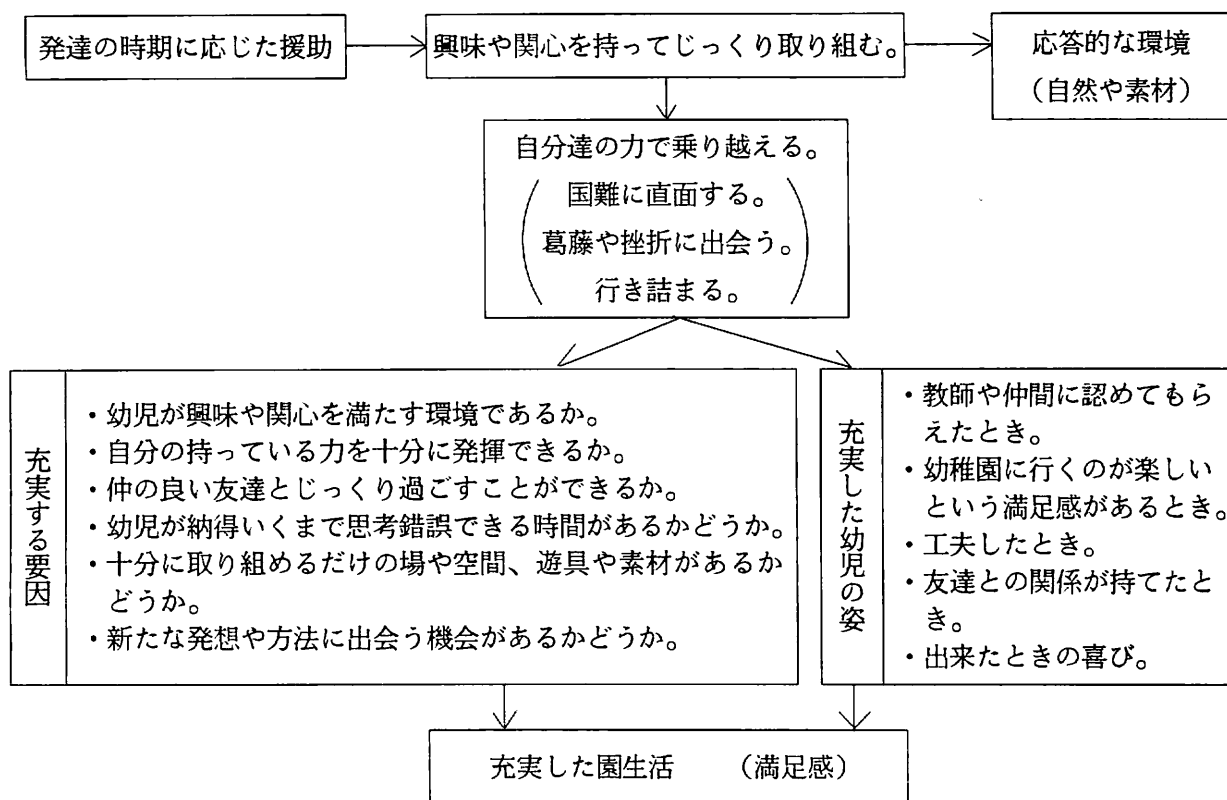
幼児に対する教師の心構え、援助のポイントは下記の通りである。活動状態を捉え、方向づけ、友達関係の調整を図り、幼児が望ましい方向に活動できるように工夫することが重要になってくる。

教師の心構え	全幼児を援助する気持ちで関わる。 幼児と心のキャッチボールをするようなつもりで関わる。 幼児の性格に合わせて言葉かけを工夫する。 小さなきっかけをとらえて、様々なことへ広げていけるようにする。 心の余裕と時間的なゆとりを持つ。 柔軟に対応し、実態に合わせてすぐに修正する。
--------	---

具体的な援助のポイント	コミュニケーションをはかり何を求めているか探る。 場に応じた関わり方をする。 それぞれの幼児のペースに合わせる。 個々に応じた援助をする。 時にはアイディアやヒントを与えたり技術を教えたりする。 幼児ができるものは生かして見守る。 求めている時期を確認する。 誤っていれば修正をし別の援助をする。 その子の持ち味を大事にする。 教師自身もチャレンジ精神を持ち、幼児と共に成長する。
-------------	---

3 充実した園生活

幼児がどのような環境や機会に出会い、どのように取り組んでいくかによりその育ちが左右される。



4 砂遊びの年間指導計画

学期	幼児の姿	砂遊びのねらい	幼児の活動	指導上の留意点
一学期	- ほとんどの幼児が砂遊びが好きである。しかし砂遊びの経験のない幼児や、砂が服につくことをいやがる幼児もいる。 4月～5月頃は、グループでかたまっているが、同じような遊びをしていても互いのつながりが少ない。 6月中旬頃から、グループで役割分担して遊べるようになる。	- 手や足や道具を使い砂の感触を楽しむ。 - 砂の手ざわりを知る。(さらさら、ざくざく) - 友達と遊ぶ中で、自分のイメージを伝えて遊ぶ。	- ままごと遊び、砂、葉っぱや花などを使って食事作りをする。 川、プール、ダムを作り、水を流したり、ためたりする。	- 手足についた砂は、バケツなどの中で水洗いするよう習慣化するまで指導する。 - 道具は自由に使ったり、片づけたりしやすいように種類別にかごを用意したり絵印をつける。 - 砂は安全清潔に保つように常に配慮する。
二学期	遊びに見通しができ、グループで役割を分担したり、交代したりして、一つの目標に向かって遊ぶことができるようになる。	グループで作り方、方法、手順など相談し、協力して遊ぶ。	グループで川、池、ダム、山などを工夫して作る。	ねらいや活動に合わせて道具の種類、数や材料を用意する。
三学期	いろいろな材料、道具をうまく使いこなし、自分の思い通りに使うことができるようになる。	グループで目的を持って遊び、役割を分担したり協力したりして遊ぶ。	山、川、ダム、トンネルなどをつなげて総合的に組み合わせる遊び。	道具は既成のものでなくても、多角的に使用できるもの。危険でないものを用意する。(木片、板、ヒューム管)

5 素材、環境の年間指導計画

	発達の時期	幼児の活動・素材や環境の工夫	教師の援助
一期 (四月～五月中旬)	・教師との関わりの中で安定していく時期	・個の遊びが充分にできる素材や環境作りをする。 ・固定遊具・砂遊び・土いじり・ボール遊び ・ままごと・ブロック・パズル・積木 ・絵を描く・絵本・油粘土 ・素材への興味があり、例えば砂遊びでは感触を楽しんでいる。それぞれの素材が持つ特性に体験的に気づく。	・スキンシップをはかったり、一人一人に声かけをしたりして接する中で幼児との信頼関係を作っていく。 ・教師がいて安定していることを配慮し各々の思いをじっくり聞いてあげる。
二期 (五月下旬・六月・七月)	・友達と関わるのを喜び、周囲の人や物への興味関心が広がり生活の仕方やきまりが分かり、自分で遊びを広げていく時期	・好きな友達を核にして友達関係を広げる。いろいろな素材に関わって遊ぶ。 ・砂遊び・水遊び・だんご作り・固定遊具 ・縄遊び・ボール遊び・竹馬・パズル・積木類 ・空箱構成・ゲーム・小動物を飼う ・花の世話・収穫(枝豆・きゅうり) ・素材をある物に見たてたり、意味付けたりして活動の中に取り入れていく。	・好きな遊びを友達と一緒に取り組んでいけるように、時期と場所を十分に保障して見守る。
三期 (九月～十月)	・友達とイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく時期	・ルールのある遊びに興味を持つようになり、楽しんで参加する。 ・固定遊具・砂遊び・水遊び・土遊び・竹馬 ・フープ・スケーター・缶ゲタ ・こおり鬼・ごっこ遊び(レストラン・お化け屋敷) ・遊びに必要なものを作る。(ペープサート・折り紙・空箱構成)	・個々の力が試せる課題を与え、満足感や成功感などを次の意欲へとつなげる。 ・運動と休息のバランスがとれるよう声をかけたり、静的活動を取り入れたりする。 ・グループの中でお互いに認め合い、助け合いができるよう場面に応じて援助していく。
四期 (十一月～十二月)	・友達関係を深めながら、自己の力を十分に発揮して園生活に取り組む時期	・遊びに使う道具など、身近な素材で友達と相談し合って作り、できたものを使って遊びを工夫して楽しむ。 ・固定遊具・砂遊び・縄遊び・竹馬・木の実 ・木の葉・絵本・劇遊び・スケーター・フープ ・ボール遊び	・興味を持って試したり、比べたりできるよういろいろな場を考える。 ・個々の力が試せるような課題的なものを用意し、自分なりに課題に取り組むことによって満足感や成功感などを経験させる。
五期 (一月～三月)	・友達同士で、目的を持って幼稚園生活を展開し深めていく時期	・自分達の作りたい物に合わせて素材を選んだり、いくつかの素材を組み合わせたり、様々に変化させたりして友達と一緒に創意工夫をする。 ・固定遊具・砂遊び・土遊び・木の実・木の葉 ・木片・縄遊び・ボール遊び・スケーター ・フープ・竹馬	・活動の規模が大きくなり、落ち着きが見られる頃である。じっくり遊べる場の配慮や手応えのある活動ができる環境を配慮する。 ・知的欲求を満たしてあげられるような環境を幼児と共に作る。

6 実践事例

保育実践を通して充実した園生活が実現できるように援助の工夫を考える。

〈ねらい〉

(1) 保育実践

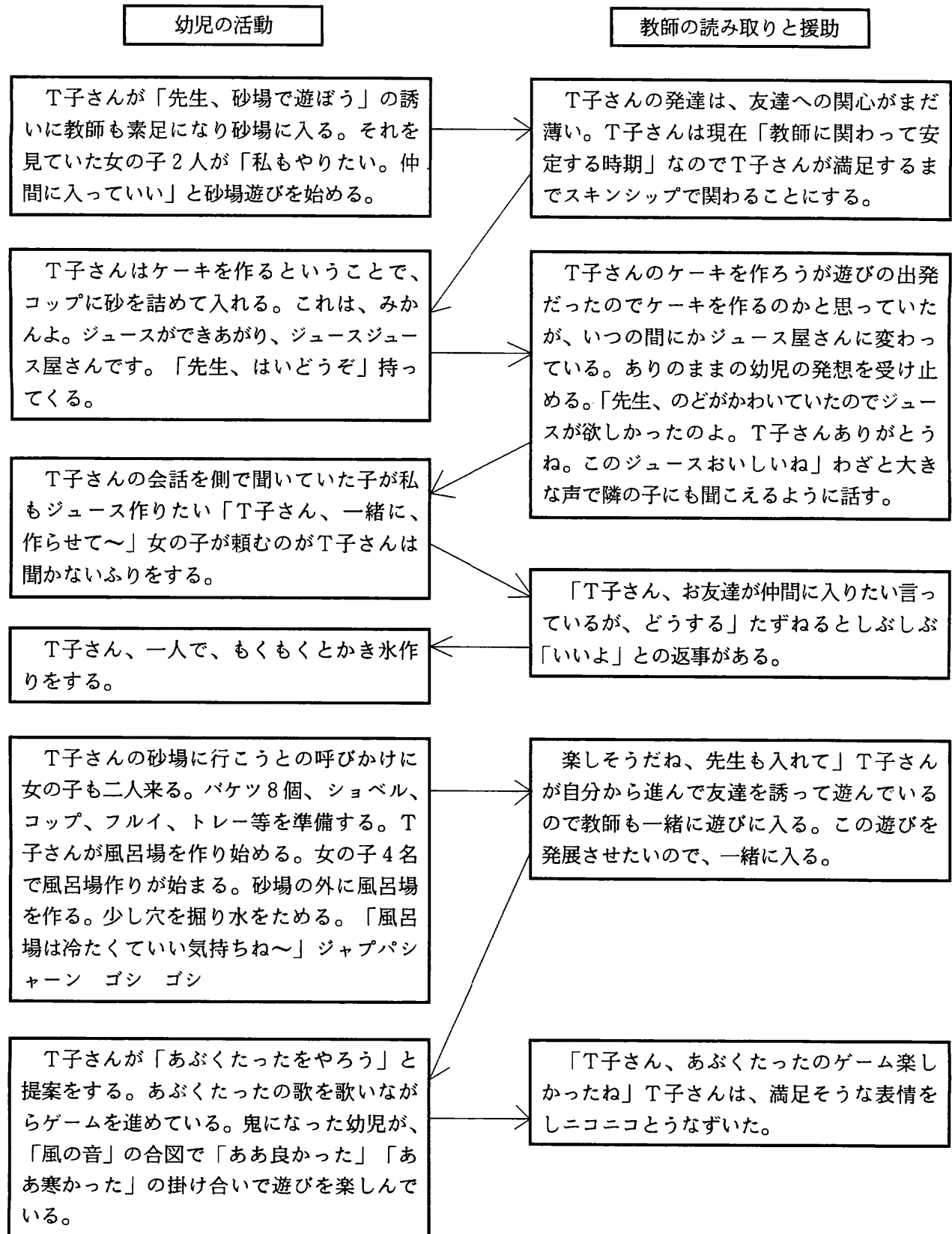
・友達と一緒に戸外で、砂、水、土での遊びを楽しむ。

日 案		2 ぐみ 男13名 女21名 計34名		担任：當銘ノリ子	
幼 児 の 実 態	園行事や梅雨等で室外での遊びが少ない。砂場遊びでは、ひとり遊びが多く見られたが6月中旬頃から友達同士でかかわり、役割分担しながら、自分達で遊びを進めている。室内での遊びはブロック類でロボット、ひこーきをつくる。主に、男の子がグループで遊んでいる。チラシでパンパン、つりざお、剣づくりがみられる。	一日の流れ	8:15 ・あいさつ ・所持品の始末 ・シール貼り・動植物の世話、観察	9:00～9:40 興味、関心をもって好きな遊びをする	10:30 ・片付け ・おやつ 12:30 降園
	ねらい 内容	内容 予想される活動 環境構成・援助	予想される活動 泥 遊 び ・だんごづくり ・ぬたくり 砂や土の感触を十分に味わい楽しく遊ぶ 砂 場 で 遊 ぶ 海、プール、川、ダム、山 } 作りをする ・バケツやジョロで水を運びダム、海、プール、川作りをする。 ・友達と一緒に山づくり、足うめをする。 友達と遊ぶ中で自分のイメージを伝え、一緒に作ったり遊んだりする 砂場ままごと遊び ・砂、葉っぱや草花等を使って食事作りをする。 ・ケーキづくり ▲教師も遊びの中に入り、おいしいそうだね。きれいだね。もう少し～するといいねえ～等の言葉のやりとりをしながら遊びを見守る。 ▲体育着に着替えて存分に砂場遊びが楽しめるようにする。 ▲だんご作りで十分遊び、考えたり試したりすることによって次への発展を考える。 ▲砂は安全清潔に保つように常に配慮する。		
ね ら い 内 容	・砂、水、土に触れ感触を楽しむ。	▲先生にもだんごさわらせてえ～。固いねえ等の会話の中で、もし、やわらかすぎでこわれた時には、なぜこわれたかを気づかすようにする。	▲遊びの中に入っていけない子には、保育者や友達がことばかけをし遊びに誘いかけていくようにする。	▲砂の感触が味わえるように時間と場所を十分に取る。	
	・自分の好きな砂遊びを友達と一緒に楽しむ。				
内 容	・役割分担しながら遊びを楽しむ。	▲砂や土の感触を十分に味わい砂や土の特性を知る。	▲友達と遊ぶ中で、自分のイメージを伝え一緒に作ったり遊んだりする。		
	・砂や土の感触を十分に味わい砂や土の特性を知る。				
視 点	・ひとり及び友達と一緒に楽しく遊んでいる。	評 価	・友達と関わりながら、自分達で遊びを進めているか。		
	・遊びの中で自分のイメージを友達に伝え合う。				

(2) 事例を通して発達と援助を考える。

砂場や水遊びに関わりながら友達と遊ぶようになるまでのT子さんの様子（5月～6月）

T子さんは自分から進んで友達と関わろうとせず、一人で遊ぶことが多い。友達が遊びに誘ってもなかなか応じない。そのかわり教師との関わりを求め、だっこやおんぶを要求してくる。教師がT子さんに目を向けるのを喜び、スキンシップをすると満足しながら教師と一緒に遊ぶのである。



(3) 実践からの考察

- ① K君は砂遊びでの経験がなく、服や手足を汚したりぬらしたりするのをイヤがる。教師としては砂遊びの楽しさを知ってほしいと思い、声をかけて砂遊びの方に誘ってみた。最初は遊びに参加しても喜ばなかった。男の子同士5名で川作りを始めた。水を吸んで来る子、川を作る子、水が流れないように遊具で工夫する子等、役割分担をしながらイメージを共有し砂遊びを楽しんでいる。最初はイヤがったが、遊び込んでいるうちに楽しくなったようである。表情が生き生きとして、リーダー的存在を発揮した。それ以来自分から進んで砂遊びをするようになった。
- ② A子さんは口数が少なく消極的である。砂だんご作りが好きで何度も繰り返しながら遊んでいる。だんご作りの経験を重ねていくうちに、しめっている砂とかわいている砂を混ぜたらきれいだんごができることを発見したようである。試行錯誤をしながら完成したのである。教師が「昨日より固いきれいだんごができたね」と声かけをすると、意欲が湧いたようである、ほめられたことにより自信がついたようで、友達との会話もはずむようになった。自分から友達に関わろうとする姿が現れた。
- ③ M子さんは、活発で、砂遊びが大好きである。日頃から砂場での活動が多く見られ、ダムや川作り等でダイナミックな遊びに取り組んでいる。M子さんが友達と一緒に楽しそうに遊んでいるのを見て、隣で見ていたS子さんが仲間に加わったのである。S子さんは消極的でおとなしい性格である。M子さん達の遊びに刺激を受けて一緒に遊ぶようになった。幼児同士から刺激を受けて遊びが展開されたのである。
- ④ 砂場で数人の子がグループで遊んでいるが、並行遊びである。T子さんは教師とは積極的に関わりを持つが、他の子とは関わりがない。
教師との関わりを欲求しているのである。T子さんの発達の時期として、幼児同士で関わるよりは、教師と関わるのを好むようである。T子さんの発達の姿を受け止め、T子さんが安定するまでスキンシップを主に心がけよう。徐々に友達と関わっていけるようにした。
前日の砂遊びでは、T子さんは他の子から遊ぼうと声をかけられたが、受け入れてくれなかった。
- ⑤ ほとんどの幼児が興味や関心を持って、それぞれの活動に取り組んでいた。
- ⑥ 遊びを工夫し、気の合う友達と一緒に自分たちで遊びを進めていた。
- ⑦ 教師は幼児の動きを見ながら状況判断をし、ヒントを与えたり幼児と共に工夫しながら教師の願いを込めて材料を活用するような状況作りをしていくことが重要である。
- ⑧ 一人一人の幼児の発達をじっくりみつめ、ゆとりをもって援助していけるようにしていきたい。
教師の言葉かけが、幼児の心を励ましたり、また逆に心を傷つけたりすることがあるので、援助をするときは豊かな言葉で話すことが大切である。
- ⑨ 素材を通して十分に遊び込めるもの、また友達との関わりができるものを取り上げ、これらに興味、関心をもって遊ぶ幼児の姿を大切にしていける必要がある。
砂遊び(写真6月)友達と一緒にイメージを共有しながら砂遊びを楽しんでいる。



V 研究の成果と今後の課題

1 成 果

- (1) 教師の援助の仕方によって、ありふれた身近な素材でも興味を持つようになるということがわかった。
- (2) 教師の豊かな表現が幼児のイメージ作りに影響を与え、充実した遊びにつながることをわかった。
- (3) 砂場遊びで開放感を味わい、心をはずませて遊びに参加するようになった幼児の例から、身近な素材のもつ教育的価値を見直すことができた。
- (4) 教師が共に遊びに加わるなかで、励まし、承認を繰り返すことにより、自信がつき新たな課題に挑戦する意欲が湧いてくることがわかった。
- (5) 教師の言葉かけによって活動が継続発展し、遊びにも深まりがみられた。

2 今後の課題

- (1) 砂場は日よけがなく夏は暑いので、もっと環境の見直しを図る。
- (2) 遊びに活用できる草花、野草、木の葉、木の実等を園内に取り入れ、幼児自身が自由に選択できるように環境を工夫する。
- (3) 先行経験が遊びのイメージを広げる。幼児一人一人の発達や生活経験を教師が把握するように心がける。
- (4) 幼児の感性を育てる時、教師自身も感性をみがく必要がある。
- (5) 幼児の目的が十分に実現でき、充実した園生活が展開されるよう、発達の時期に応じた環境を工夫する。

〈主な参考文献〉

文部省	「幼稚園教育指導書増補版」	フレーベル館	1989年
岡田正章、高杉自子、編	「砂あそび・水あそび」	チャイルド社	1991年
柴崎正行、編	「援助のポイント」	フレーベル館	1994年
黒川健一、編著	「表現」	ひかりのくに	1992年
西久保礼造 著	「保育実践用語事典」	ぎょうせい	1997年
岸井勇雄、小林龍雄、編	「表現Ⅲ 造形的表現」	チャイルド社	1980年